
研究ノート

公募型企画展示

「ドキュメント災害史 1703-2003 地震・噴火・津波,そして復興」の記録

展示の過程と構成

Research Notes

西谷 大

1 展示を記録する目的

本稿は、2003年7月6日～9月21日までおこなった公募型企画展示「ドキュメント災害史 1703—2003 地震・噴火・津波,そして復興」(以下、「ドキュメント災害史」)における、展示の過程と構成の記録である。

国立歴史民俗博物館(以下歴博)は、2003年11月で開館20周年をむかえた。常設展示とは別に、毎年おこなってきた企画展示はすでに24回に及ぶ。しかし企画展示そのものを記録するという視点からみた場合、いくつかの問題点を抱えていると考えられる。

展示図録を取りあげてみよう。歴博では企画展示の開催にあわせて、多くの場合展示図録が刊行される。その内容は、展示した資料リストや資料の写真およびその解説と、展示に関わる研究論文を掲載するという2つの側面を有している。各企画展示の代表者や展示プロジェクト委員会の方針によって、展示資料記録か研究論文のどちらに重きをおくかという違いはある。いずれにしても展示図録の目的はビジターが展示をよりよく理解してもらうためと、どのような資料を展示したかという記録を残す役目を有している。

しかしこれまでの展示図録には、「展示を記録する」という側面からみた場合、大きな欠点が存在する。展示図録は、展示開催日と同時に出版しなくてはならないという制約がある。そのため展示開催中の展示場の記録を、展示図録に盛り込むことはまず不可能である。展示図録は展示する資料の目録と解説があれば十分にその役目を果たしており、わざわざ展示場で資料がどのように展示されたかという内容を盛り込む必要はないという考え方もあろう。

しかし歴博の展示はいわゆる優品展示ではなく、研究展示を標榜している。資料のもつ美術的価値に重点をおいた展示ではなく、文献資料、考古資料、民俗資料などを利用しながら、過去から現在までの歴史や社会、人びとの生活をビジターに理解してもらうことを目的としている。そのため展示の方法は、資料を美しく見栄えよく展示ケース内に並べただけでは意味がない。ビジターに展示そのもののコンセプトを、展示資料を介しながら理解してもらうためのさまざまな工夫が必要になってくる。

ところが展示図録に掲載可能な内容は、展示開催前に準備できる資料リスト、資料の写真、資料

解説、それに展示内容に関わる研究論文等に限られる。研究展示にとっては重要な課題であるはずの、展示場での展示コンセプトや、それに基づく具体的な展示場での資料の展示方法、それに展示場全体の記録は、展示図録からは抜け落ちてしまうことになる。

次に企画展示の枠組みを記録するという点から考えてみたい。歴博がおこなってきた企画展示のもつ問題の一つは、展示に関わるさまざまな経験やノウハウが継承されないことだと考えられる。その要因の一つは、歴博の組織がもつ根本的な問題にも関わっていると考えられるが、今回はその点にはふれない。

それぞれの展示の長所・短所が、次の展示にあまり生かされない要因の一つは、展示がどのような目的をもって組み立てられていったのかという、展示の成立過程とその結果としての展示記録が少なかったことに原因の一つがあるのではないかと考えられる。展示の結果だけからは、新たな創造的な展示構想を生み出す知恵ははぐくみにくいと思われるのである。

確かに内部的には展示を総括した記録が存在する。しかしそれはごく簡単なものであり、また一般研究者や市民に公開されたことはなかった。藤尾慎一郎は、1996年に開催した企画展示「倭国乱る—卑弥呼の登場まで—」についての記録を残している〔藤尾1998〕。このなかで藤尾は、展示に至る過程から展示プロジェクトでの展示内容の決定プロセスを詳しく述べている。それだけでなく展示場での展示構成や、展示に使用したジオラマ模型の製作意図にまで言及している。

この企画展示は筆者もメンバーの一人であったが、その経験と藤尾が残した記録は、次に担当した企画展示「新弥生紀行—北の森から南の海へ—」（代表、設楽博己）や、企画展示「よみがえる漢王朝」（代表、西谷大）の展示構成を考えていく上で非常に参考になった。

例えば1999年の春に開催した企画展示「新弥生紀行—北の森から南の海へ—」の展示場での一つの手法は、ジオラマを展示場でのインデックス代わりに使ったことである。ジオラマにさまざまな場面を盛り込み、謎解きのパネルをその周囲に配置し、さらに壁に設置された展示ケースではジオラマを復元した際に根拠になった実物資料を展示した。その記録は『おもしろ歴博シリーズ1 模型で見る歴史のドラマ—ジオラマのできるまで—』という図録とは別の本として、展示期間中に出版した〔西谷・設楽1999〕。企画展示「倭国乱る—卑弥呼の登場まで—」の経験と展示の記録を残すことの重要性に気がつかなければ、こうした企画は実現しなかったであろう。

企画展示「ドキュメント災害史」では、企画展示の準備段階である1年間の共同研究と、続く1年半の展示プロジェクト委員会のなかでおこなわれてきたさまざまな議論の記録を、展示通信『歴史・災害・人間』と題するニュースレターとして11号にわたって発行した（編集北原糸子・寺田匡宏、発行国立歴史民俗博物館、2001年5月創刊）。さらにニュースレターをまとめて、『歴史・災害・人間〈災害史・原論〉上、〈展示の文法〉下』として発行した〔北原糸子・西谷大・寺田匡宏、2003〕。ニュースレターを企画立案し編集を担当した寺田匡宏によれば、その目的は結果としての展示の部分だけでなく、展示に至る過程までの研究者の試行錯誤をリアルタイムで記録し、一般市民が「災害史の新局面が展開していく現場の目撃者となる」ことにあった。

さて歴博の企画展示が一般市民に公開されるまでには、さまざまな過程がある。展示を実際に開催するには、共同研究や展示プロジェクト委員会でおこなう研究上の試行錯誤だけではなく、具体的な展示場での展示構成案、歴博の展示課と展示業者を含めた実行案の決定や会計的な問題など、

展示の計画から準備に至るまでの全般が展示を実現させるための重要な過程である。展示は、多くの研究者や歴博のスタッフが関わってはじめて可能になる。

展示の記録を総括的に残すという作業は、実はこうした多方面にわたる展示作業過程と、それぞれの立場からの証言を総合的にとりまとめる必要がある。筆者は今回の展示過程のすべてを総括できる立場ではなく、またその能力もない。本稿はあくまで筆者が関わった公募型企画展示「ドキュメント災害史」を立ち上げたいきさつと、展示場での展示構成に関する部分についての記録であることをことわっておきたい。

2 公募型企画展示の成立過程

今回の企画展示は、歴博だけでなく日本の歴史系博物館にとっても数少ない試みである公募型企画展示である。代表者は北原糸子である。最初になぜ歴博で公募型企画展示が企画されたのか、その背景について述べておきたい。歴博は、1997年には設置されてからすでに16年が経過していた。歴博は設置以来、歴史・考古・民俗学および関連諸科学の協業による歴史研究を実践し、その研究成果を総合展示や企画展示などを通じて広く公開してきた。しかし歴博を取り巻く社会的、学問的状況は急速に変化してきていた。

その一つが、政府の方針である行政改革の影響である。定員と予算の削減に伴って、大学共同利用機関の共同研究を推進する経費のなかでも、1997年には特定研究経費が事実上廃止された。かわってCOE制度が導入され、差別化と競争原理が導入された。また1998年から、大学の独立法人化問題が緊急の課題として浮上し、歴博を含む大学共同利用機関でも多くの議論がなされていた。

もう一つは、学術審議会が1996年6月におこなった21世紀へむけての答申である。「科学技術創造立国をめざす我が国の学術研究の総合的推進について」と称したこの答申の内容は、大きく3つの目標を掲げている。

1 世界最高水準の研究の推進

- ・世界水準の研究を展開する拠点形成（COE性）
- ・予算、研究環境の重点投資（差別化、競争原理）
- ・世界を引きつける学術研究（国際性、国際評価）

2 21世紀の新しい学問の創造

- ・細分化された学問の統合による新たな学問の創造（創造性、新規性）
- ・人文、社会科学の振興と統合的研究の推進（学際性）

3 社会への貢献

- ・社会的期待への積極的対応（社会還元、国民理解の推進）
- ・大学、試験研究機関、企業などとの協業（社会に開かれた学術研究）

こうした状況のなかで、歴博は1997年および98年に外部メンバーによる研究および展示の第三者評価をおこなった。その報告は、「国立歴史民俗博物館第三者評価報告書」として、佐原眞館長（当時）に提出された。第三者評価の目的は、歴博がもつ大学共同利用の研究機関としての側面と、生涯学習時代の市民学習機関としての博物館の側面をいかに両立させるかという視点から、その間

題点を洗いだすことに重点がおかれた。

報告書のなかで展示に関しては、「魅力ある企画展示の開催」「入館者研究の養成」「新しい展示技術の導入」など、まず観客の立場にたった展示研究が必要なが提言された。こうした流れのなか1999年4月に歴博内部で、歴博の将来構想を中期、長期的視野から検討するための「将来構想検討委員会」がたちあげられた（委員長、小野正敏、本館教員）。提言は1999年10月にまとめられた。議論の前提は、これまで歴博が内部でおこなってきた「将来構想」および、さきに述べた「国立歴史民俗博物館第三者評価報告書」、そして学術審議会の答申の「科学技術創造立国をめざす我が国の学術研究の総合的推進について」であった。

報告書では当時の歴博の現状を「将来計画」を描く計画に対して、「総合性をもった実施方針がなく、各案件が個別におこなわれており、全体の総合戦略面が弱いこと」と指摘した上で、具体的な提言をおこなった。内容は6点にまとめられる。

- 1 中核的研究機関として、博物館＝大学共同利用機関＋大学院
- 2 共同利用機関・社会教育機関としての存在感と必要性
- 3 各事業分野のバランスと統合化
- 4 先進性、新規性、独自性の目玉作り
- 5 中、長期ビジョンによる目標設定、事業達成型の組織、運営
- 6 構成員のやりがいと満足、将来への展望をもつ実現可能な計画

このときに提出されたアクションプランの一つが、「アジアの中の日本」である。個別の共同研究や企画展示プロジェクトを可能な限りリンクさせる。そして歴博が法人化する年度にあわせて、その年度の総合課題を「アジアの中の日本」とし、展示だけでなく研究の側面からも各種の事業を展開していくという具体的なプランの提言であった。企画展示「東アジア中世海道―海商・港・沈没船―」（2005年3月23日～5月22日、代表小野正敏）は、このアクションプランのなかで当初は国際巡回展示として計画された企画展示である。

つまり提言の内容を一言でいえば「歴博の研究・展示は、中、長期にわたる明確なビジョンをもって、学際性、国際性を保ちつつ、具体的なプランをたて実行すること」といえる。

さて将来構想検討委員会の提言と併行して、歴博の研究委員会でも歴博の共同利用機関としての中核的な研究である基幹共同研究および個別共同の見直しをおこない、その提言は2000年2月に館内で了承された（研究委員長、篠原徹、本館教員）。基本コンセプトは、「学際性」「国際性」で、それに加えて「公募」「公開」を強く主張した。このコンセプトにそった改革の1点目は基幹研究の課題の中心を、常設展示の大幅見直しである第2期展示構想とも関連する「戦争」と「環境」にリンクすることであった〔篠原2000〕。

2点目は個別共同研究のあり方を、多様な形態にかえることであった。新たな個別研究として「科研型」、「展示型」、「資料型」、そして「公募型」の4つを設定した。「公募型」は2つの形態に分かれる。その一つは歴博がもつ膨大な資料をより有効に使うため、館外の実験者に歴博が所蔵する資料を公開し研究してもらう方法である。公募の結果、2001年度より「水木コレクションの形成過程とその史的意義」（京都大学人文科学研究所、高木博志 他19名）が採用された。

もう一つの公募型が、「展示型」である。これは最初に個別共同研究をおこない、その後その

成果を展示に結びつけようとする形態である。この公募型研究の公募によって、2001 年度より館外の研究者である北原糸子の「歴史資料と災害像」が共同研究の課題として採用された。共同研究は 1 年間おこなわれ、2002 年度からは企画展示「ドキュメント災害史」の展示プロジェクトに移行し、2003 年の展示開催へとつながるのである。

歴博の研究の改革に伴って、COE 非常勤研究員の制度を有効に活用するため、学際性や国際性を考慮に入れて全館的立場から順位をつけて応募することにした。「歴史資料と災害像」にも、1 名の非常勤研究員（寺田匡宏）の採用が決定された。

このように公募型企画展示「ドキュメント災害史」は、歴博の 21 世紀の博物館事業の将来計画をみすえて計画されたものである。歴博のもつ研究・展示・資料の収集といった機能を活性化し、開かれた博物館を達成するためには具体的にどうすればいいのか。また市民へ研究の成果をいかに還元するのかといった、歴博の根本に関わる問題をみすえた歴博独自の研究・展示戦略の一つだったと位置づけられよう。

3 展示構成の決定過程と問題点

2001 年度の共同研究は、北原糸子を含む外部メンバー 13 人、歴博館内メンバー 6 人によって構成された。2002 年度に発足した展示プロジェクト委員は、館外 20 人、館内 4 人である。共同研究および展示プロジェクトメンバーの母体となったのは、結成 20 年になる歴史地震研究会に属する有志を中心とするものであった（事務局、東京大学地震研究所、代表幹事、都司嘉宜）[北原 2003 a]。この有志と歴史地震に限らず、噴火、津波を含め、広い枠組みで関心を共有する文系の研究者を交えてプロジェクトチームが作られた。

2001 年度には計 4 回の共同研究会が実施され、2002 年度は計 4 回の展示プロジェクト委員会を開催した。⁽¹⁾ 共同研究および展示プロジェクト委員会の討論の方向は、2 つに分けることができる。第 1 に各研究者が、研究してきた内容を発表してもらうことである。その際、なるべく実際に災害のあった現地を踏査することにした。

第 2 に、第 2 回目の研究会以降は、かならずそれまでの災害の研究内容と展示予定の資料を把握しつつ、歴博での展示構成案を毎回提出したことである（写真 1、写真 2）。共同研究および展示プロジェクトの研究者の多くは、これまで展示に関わったことがほとんどなかった。研究成果のどの部分を、資料によっていかに表現するのか。また展示には空間的な制限があることを認識してもらうためであった。展示を構成するという立場からみた場合、2001 年度の共同研究会と、2002 年度の展示プロジェクト委員会を通じて、いくつか明確な問題点がみえてきた。

第 1 に理系・工学と文系（歴史学）とでは、展示に対する期待が異なっていたということである。企画展示「ドキュメント災害史」は、江戸時代から近代はじめまでの歴史上の災害を取りあげている。北原糸子の展示意図は、「この企画展示を通して、災害史研究に携わる理学、工学系の人たちと、災害史を手掛ける歴史研究者がともに同じ素材について考えることを通じて、これまで欠けていた相互の討議がスムーズになされることが期待されたからである。……展示あるいは展示場は、普段交わることのない研究者同士、あるいは研究者と観覧者が互いに親しく交わることのできる新



写真1 第2展示室イメージ図（展示プロジェクト提出案）

しい出会いの場と考えたのである」と述べている〔北原 2003 b〕。

しかし津波工学が専門の首藤伸夫は、過去の災害研究は、あくまで現在の防災を考えるための研究であると述べる〔首藤 2001〕。そして展示に求められるのは情報の共有であり、歴博で展示するだけでなく、災害の危険性がある地域の人に考える場をもつような工夫をしてほしいと主張している。火山学が専門の荒巻重雄は、「過去の事例をよく理解し、災害の原因と結果の関係を解明し、将来の防災・減災対策を充実させてゆくことが重要である。本展示がそのような目標にいくらかでも役立てば幸いである」と述べている〔荒巻 2003〕。また津波学の今村文彦は、「企画展示での最終的な目的が、実際に役にたつ知恵、情報を提供することである」と主張している〔今村 2003〕。

つまり理系の研究者にとっては、過去の歴史災害のメカニズムと被害状況、次にそこから導き出される防災のための具体的方法と、人びとの防災意識を啓蒙することに関心が高く、歴史災害を教訓的に扱わないような展示は意味がないという主張である。

それに対して、研究会においてゲストスピーカーとして発表した原田憲一は、歴史災害を今までのように「防災」という視点だけでとらえるのでは不十分ではないかという疑問を提出した〔2001年10月16日、東北大学工学部における津波研究会に於いて〕。災害も地球の歴史の一コマとしてとらえ直せば自然活動の一つであり、例えば火山活動も地球の造山運動の帰結にすぎず、「人間の歴史の間に火山爆発があるのではなく、人間の歴史は火山爆発の歴史の間をぬって生きつづけてきた」としてとらえられるべきだと主張した。また原田は、地球規模の視点をもって人間と大地の関わりを文明史的観点から解明していく必要性を提唱し、それが「文理融合」の新たな学問の創出につながると強く主張している〔原田 2001〕。

代表者の北原糸子自身も、「人文系の研究者には、災害に遭遇した人びとは、何を伝えようとして記録を残したのか、彼らの作成動機を超えてそうした記録類が現代のわたしたちの心に喰いいっ

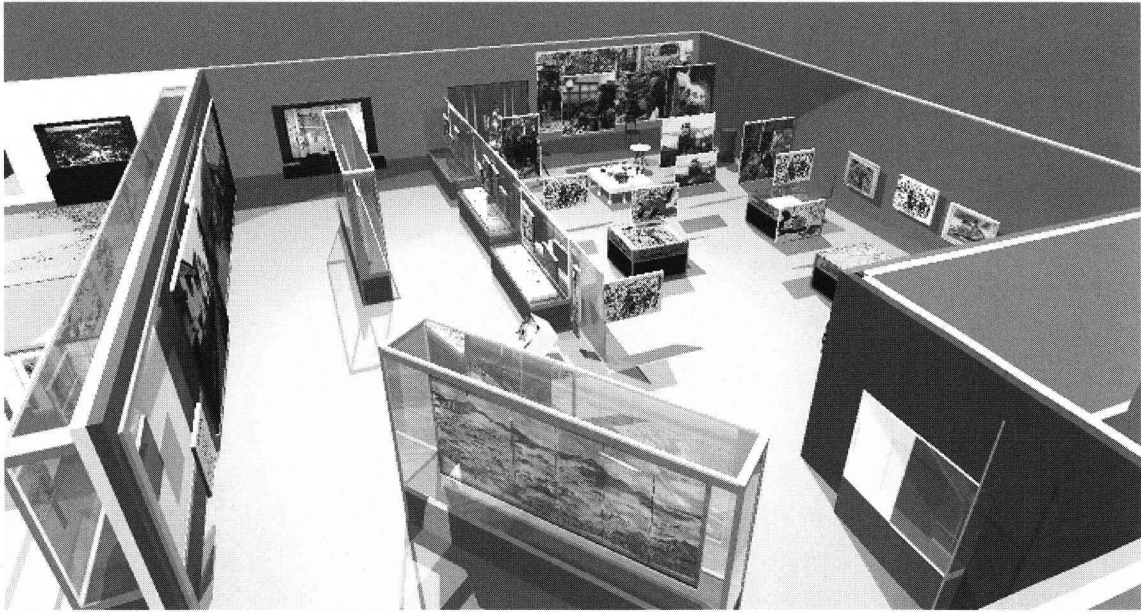


写真2 第3展示室イメージ図（展示プロジェクト提出案）

てくることの意味を考えてもらうことにした」[北原 2002]と語るように、災害を展示する意図はメカニズムや防災意識を高めるといった視点に限定するものではなかった。これまでの歴史災害において、人びとがどう災害とむかいあったのか、むしろそこに現在の私たちが学ぶべき姿があるといった視点をもっていた。

このようにプロジェクトの基本的なコンセプトは、「理科系と文系の総合」をうたい、戦後の理科系と文系の学問としての乖離を、今一度いかにして総合化するか、それを災害という歴史事実を土俵とすることで、何か新たな視点がみえてこないかということが一つのもくろみであった。しかし、この点に関しては篠原徹が「戦後の人文科学と自然科学が歩んだ道を自覚的に問い直しうる地平に至った」と述べるように[篠原 2002]、新しい災害学とでもいうべき学問を作りあげるまでには至らなかった。

第2に問題になったのは、具体的に展示する過去の歴史災害の数が非常に多いということであった[西谷 2002 a]。1年の研究会を経て、各専門分野の研究者の研究発表をもとにして、テーマの数と内容がほぼ固まってきた。展示の構成は、津波、地震、火山、再生への道、というテーマに決まったのだが、さらにこれらの大テーマの下には、それぞれに中テーマがある。

- ・津波（明治・昭和三陸津波、昭和33年チリ津波、元禄地震津波[千葉房総]、安政東南海津波、南海地震と津波）。
- ・地震（飛越地震、善光寺地震、元禄地震、安政江戸地震、関東大震災）。
- ・火山（富士山宝永噴火、天明浅間噴火、雲仙普賢岳寛政噴火）
- ・再生（象潟地震、善光寺地震稲荷山と阪神大震災、鯉絵）

展示構成を考える上で問題になったのは、テーマ数が多いだけでなく、それぞれの災害は、時代も異なれば発生した地域も日本全国にわたっているということである。展示場では、ビジターに基

本的な情報として、災害が発生した地域・時代・過程・メカニズム・人びとの対応といった情報を提示しなければならない。しかし従来の実物資料とパネルを使った手法だと、ビジターは一体今、目の前に何が展示してあるのか、情報量が多すぎて理解しにくくなることが予想された。

第3に今回の企画展示において展示できる資料は、災害を描いた絵図、災害を記録した文献史料、土石流や火砕流によって埋まった生活関連の考古遺物、それに理系の研究者の論文に掲載されている数値データなどであった。研究上は非常に重要なのだが、見る側にたつと迫力に欠ける「地味」な展示資料が中心であり、展示にビジターを引きつけるにはかなりの工夫が必要になることが予想された。

この他にも、津波工学が専門の首藤伸夫は、過去の災害研究はあくまで現在の防災を考えるための研究である立場から、展示に求められるのは情報の共有であるという〔首藤2001〕。そして歴博で展示するだけでなく、災害の危険性がある地域の人びとに考える場をもつような工夫をしてほしいと、そもそも災害地ではない歴博で災害展示を開催することそのものに疑問を呈するという主張もあった。例えば三陸での津波被害からの防災を啓蒙する展示を、遠く離れた千葉県佐倉市で開催しても意味がないというのである。

また篠原徹からは、客観的な歴史叙述とは一体何なのか。そもそも社会を統合して歴史研究者が歴史を叙述することが可能なのか、といった現在の歴史学に対する根元的な問題が提出された〔篠原徹2002〕。さらに寺田匡宏は、歴史研究者が過去を過去の歴史としての思い出としか提示できず、このことが特に「若者」が歴史系博物館に来館しつづける原因になっているのではないかと指摘した〔寺田2002〕。

では次に、こういったさまざまな研究者の試行錯誤を抱えながら、具体的にはどのような展示構成をおこなったか述べてみたい。

4 具体的な展示構成

1 全体構成

展示内容は、江戸時代から近代はじめまでの歴史上の災害を取り上げ、①災害当時の絵図や記録はどのような目的で何を記録するために作られたのか、②歴史災害の記録や絵図からどのようなことがわかるか、③そこから災害像の復元は可能か、④科学的分析に基づく災害像から災害予測は可能かといった内容に集約できる。

共同研究と展示プロジェクト委員会における議論を経て、「明確なコンセプト」「ストーリー性」「あそび心」「動きのある展示」という展示構成の基本方針をたてた（西谷2001 a・b・c, 2002 a・b・c, 2003 a・b）。地震、噴火、津波、再生というそれぞれのテーマを一つの短い劇的な歴史と考え、各コーナーに明確なコンセプトとストーリー性をもたせる。そして展示をわかりやすく、しかもおもしろくみせるため、あそび心をもった展示を工夫することが必要だと考えたのである。

展示は、2部構成をとった。第1部は、地震、噴火、津波で、第2部は、復興である。第1部では、江戸時代から近代はじめまでの災害史の読解をもとに、理学と工学の分析手法による展示を中

心に展示することにした。つまり災害の実態とそのメカニズムの解明が中心テーマである。

第2部は、災害から社会が立ち直る道を歴史のなかにさぐりながら、社会の復興、再生とは何かを問いかけるというのが主要テーマである。こちらはおもに歴史学による展示である。このように2部にわけること、理系と文系の研究者の目的別に沿った内容を展開することにした。

展示場の配置は、エントランスホールを導入部分とし、エントランスホールのマルチ画面から中庭は津波のコーナーとし、第1企画展示室は地震、第2企画展示室は火山、第3室から図書室前を復興のコーナーとした(図1)。

企画展示室だけでなく、普段は展示がおこなわれないエントランスホール、中庭、図書室前を利用することで、展示面積を広くしテーマの多さに対処することにした。それだけでなく、歴博の企画展示室のもつ、一体どこにあるのかよくわからないという導線上の根本的な問題を、エントランスホールから展示をはじめることで、解決できないかという意図も働いている。

中庭や図書室前を活用することのもう一つの利点は、企画展示室(高さ約4m)では不可能な高さを表現する展示が可能になったことと、中庭に位置する池も展示に利用することが可能になったことだった。以下各コーナーについて、展示構成を中心について述べる。展示した個々の資料の詳細い内容については、展示図録を参照していただきたい。

2 エントランスから、第1津波コーナー

エントランスホールを入るとその正面には、雲仙普賢岳の平成噴火のさいに被災した遺物が展示してある。まずここで、今回の展示が歴史災害とは称しているが、それは過去のものではなく、非常に身近な自然現象の一つであるということを感じてもらう意図がこめられている(写真3)。

エントランスホールを右手にいくと、津波のコーナーがはじまる。津波コーナーを担当したメン



写真3 エントランスホール

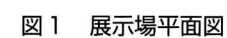




写真4 中庭に通じる階段に並べられた津波碑

パーからは、展示の内容として津波のメカニズム、明治・昭和
三陸津波⁽²⁾、安政東海、南海地震津波⁽³⁾、それに津波碑を展示する
という案がだされた。さらに災害の実態がわかるだけでなく、
ビジターに津波の「パワー」と「高さ」と、可能ならば「津波
の早さ」を展示場で表現したいという希望がだされた。津波災

害のメカニズムとパワーの展示表現については、石垣島で1771年に発生した明和の大津波をコン
ピューター・グラフィック（以下、CG）で再現し、9面マルチで繰り返し放映することにした。今
回の展示では、5つの災害についてCGを製作した。CGを各コーナーでみせることで、動きのある
展示をめざすとともに、最初に災害のストーリーを視覚的に理解してもらうという手法を使った。

津波のメカニズムと被害は、パネルで説明するとともに、パソコンを2台設置し、「津波発生の
メカニズム」、「津波数値計算CG集」、「三陸での津波災害」、「南海津波災害」、「津波に襲われた人
はどう逃げたか」、「現況での津波避難に関する検討」、「我が国の津波対策」の7本の番組をパワーポ
イントで製作し、ビジターが自ら操作できるようにした。

中庭に至る階段には、三陸、千葉、四国などの津波碑の写真を、パネルとして15枚並べた（写
真4）。津波碑の分布パネルとともに、実物大近くに引き延ばした津波碑のパネルの列が、地下室
の企画展示室への導線になっている。

この津波碑の列の上には、10mの幕を垂らすことにした（写真5）。垂れ幕には、昭和南海地震の
津波（7m）、チリ地震（8m）、元禄地震（10m）といった、過去の津波の高さを表記した。中庭
の池には、津波を実験的に起こす装置を設置した（図2）。ここには常時ボランティアを配置し、装
置による津波の発生メカニズムの説明とともに、津波の高さを表現した垂れ幕を使って、「三陸津
波では高さ38mの記録があり、この垂れ幕のさらに4倍近い津波が発生した」といった補助説明
をとり入れることで、津波の高さを体感してもらおうと意図した。



写真5 津波の高さを表現した10mの垂れ幕

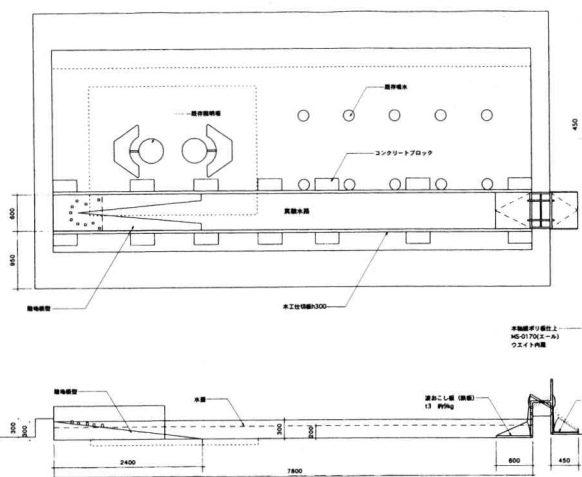


図2 津波発生実験装置

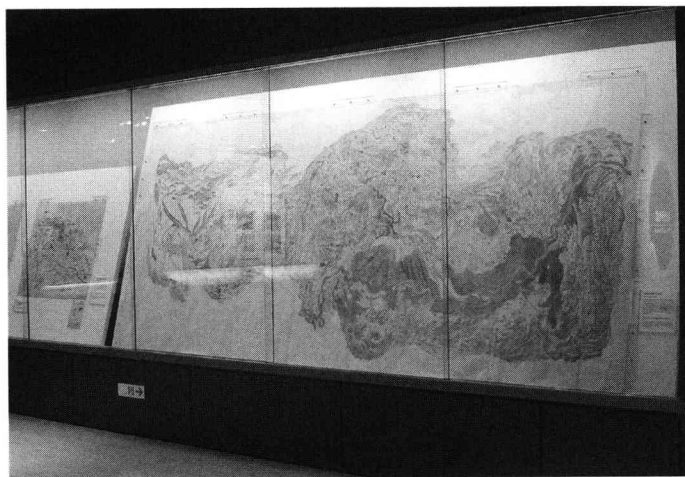


写真6 「信州地震大絵図」

2 第1部地震

地震コーナーは第1企画展示室を使い、善光寺地震⁽⁴⁾、飛越地震⁽⁵⁾と、首都である江戸、東京で起こった元禄・江戸・関東地震⁽⁶⁾を取り上げた。

地震コーナーのトップには、善光寺地震のさいに描かれた「信州地震大絵図」を展示した（写真6）。この1枚の絵図には、1847年5月8日の午後9～10時ごろに、長野県の善光寺平を震源とした地震によって発生した火災や、4万カ所余の山崩れ、それに虚空蔵山の山崩れによる犀川の堰き止めによってできた長さ30km以上の湖が描かれている。絵図にはそれだけでなく湖が5月28日には決壊し下流域が洪水にみまわれるという、時間差のある災害の様子が一堂に描かれている。

「信州地震大絵図」の豊富な絵の内容を、パネルだけでビジターに伝えるのは困難だと判断した。そこで二つの方法で、この絵図の解説を試みた。その一つは、タッチパネルによる、「信州地震大絵図」の解説である。絵図を超精細デジタル映像資料としてパソコンに取り込む。これを、50インチの大型のタッチパネル付きのディスプレイ上で映すのである。ビジターは、指でタッチすることで絵図の部分拡大も縮小も自由自在に可能である。さらに絵図上に描かれた地名を拡大するとともに、その災害の様子も閲覧できる。また災害に応じた解説文も表示した。

もう一つの方法は、「信州地震大絵図」の複製と、それにあわせて5万分の1の地形図を拡大したものを上下に展示した。そしてスイッチを押すと大絵図と現代地図に対応する土砂崩落地点、川の堰き止め場所、洪水地帯など該当地点が同時に電灯で点灯するようにした。さらにここにもボランティアを配置して、ビジターに説明してもらうことにした(写真7)。

飛越地震のコーナーでは、災害絵図の展示とともに、CGを使って、まず災害の実態とストーリーをみて理解してもらう方法をとった。ここではさらに床に、飛越を含む北陸から東海に欠けての3D写真を貼った。これは左右が赤と青のメガネをかけることで地形が立体的に浮かび上がる地図である。飛越地震が起こった常願寺川の上流と富山平野の位置と地形を、ビジターに楽しみながら理解してもらおうと考えた（写真8）。



写真7 上が絵図の複製，下が現代の5万分の1の地図。右がスイッチの台。



写真8 3D地図が床面にはってある。その向こうの画面に、飛越のCGが映しだされる。



写真9 元禄・江戸・関東震災の展示風景



写真10 富士山宝永噴火のCGと、現在の富士山の写真。右にはこのコーナーを担当した研究者の似顔絵がはってある。

元禄・江戸・関東震災の目玉は、地震のメカニズムと3地震を比較して首都を襲った地震の特性が、地震と地盤の強弱と密接な関係にあったという新知見を展示したことである(写真9)。さらに「江戸大地震絵図」は、幅が長く一度に展示できないという制約がある。そこで絵図全体を写真にして、これをパワーポイントにとりこみ音声解説をつけて、ビジターが自由に閲覧できるようパソコンを展示場に配置した。

3 第1部火山

火山コーナーは、第2企画展示室を使い、富士山宝永⁽⁷⁾噴火、雲仙普賢岳⁽⁸⁾噴火、天明浅間⁽⁹⁾噴火の3つの火山災害を扱った。

富士山宝永噴火では、やはり最初にCGを使って、噴火の過程と被害のおよその概略を再現した(写真10)。この噴火では江戸市中だけでなく麓の須走村にも大きな被害があった。須走村がどのように復興していくのか展示したかったのだが、根拠になった資料は文字による文献資料だけだった。そこで須走村が復興していく姿を、イラストによって表現するとともに、その根拠となった資料を併せて展示することにした。こうすることで、一般のビジターにはなじみのない文献資料から、豊



写真 11 須走村が復興してゆく姿を、イラストによって表現している。

かな過去の歴史が復元できるという世界を少しでも理解してもらおうと考えた（写真 11、写真 12）。

雲仙普賢岳噴火でも、最初にCGによる再現映像を放映した（写真 13）。このコーナーでは、特に大型の絵図が多かった（写真 14）。そこでそもそも絵図がどのように使われたのかという、専門外のビジターが災害絵図をみてもっともはじめに思う疑問そのものを展示にしてみてもどうかと考えた。

絵図は災害にあった藩が、幕府から拝借金をするときに使われることが多い。そこで 1792 年の普賢岳噴火のさいに、島原藩が幕府に絵図を提出したであろう場面を復元した。絵図は「島原大變大地図」と、「島原大變後地図」の 2 枚を用意した。そして島原藩の江戸留守居役と、老中の用人の二人の人形を用意し、その交渉風景を再現するとともにボランティアを配置して、ビジターに説明するという方法を使った（写真 15）。

天明浅間噴火もやはり、導入はCGによる再現映像である。このコーナーでは絵図等の展示資料以外に、泥流によって埋没した吾妻川天明遺跡出土遺物を展示した（写真 16）。この遺跡調査は、詳細な発掘調査から当時の泥流の実態を明らかにしている。それだけでなく災害当時の畑に植わっていたサトイモの痕跡から石膏型をとり、それを研究することで天明浅間噴火と天明飢饉との関連も追及しようとする意欲的な調査だった。そこで発掘を担当した関俊明⁽¹⁰⁾自身が登場し、遺跡を解説するビデオを撮影し、それを考古遺物の展示と併せて放映した。現場は担当した研究者の解説がもっともわかりやすく迫力があると考えたからである。

天明浅間噴火の熱泥流によって埋まった「日本のポンペイ」鎌原村の悲劇はよく知られている。「鎌原村復興絵図」は、30 年経ても 20 戸程度しか家が復元されていない村の様子を絵図にしたもののなのだが、この悲劇は現在も鎌原観音堂奉仕会の人びとによって語り継がれている。展示では、奉仕会の方々の語りをビデオに録画し、絵図と併せて放映するという手法を使い、災害が過去のものではないことを伝えようとした（写真 17）。

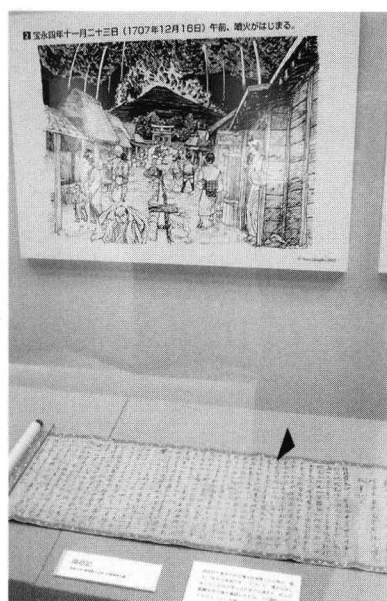


写真 12 手前が文献資料で、三角形の矢印がイラストの題材になった部分を示している。



写真13 雲仙普賢岳噴火のCGによる再現映像



写真14 雲仙普賢岳噴火に関する絵図の展示

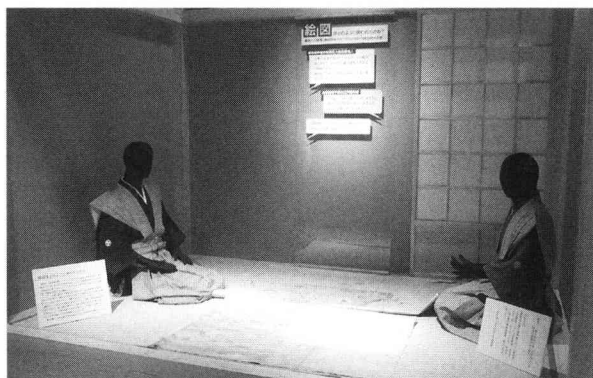


写真15 絵図がどのように使われたのかの復元



写真16 吾妻川天明遺跡出土遺物の展示。右側のテレビでビデオ解説をおこなった。

4 第2部復興

復興では3つの災害を扱ったが、それぞれの災害で復興の意味が異なった。象潟地震では「景観保存と開発の相克」を、善光寺地震で「町の復興・人の再生」を、鯉絵では「民衆の気力回復と復興願望」を、阪神大震災では「ボランティア問題」というテーマ内容である。

1804年に起こった象潟地震では、地震によって地面がおおよそ1.8mも隆起したため、象潟湖の水が外洋に流れ出てしまい泥沼だけが後に残された。もとの景観を保存しようとする民衆と開発を進めようとする権力との相克が中心課題である。展示では、失われる以前の俳聖松尾芭蕉も訪れ「きさかたや 雨に西施が ねぶの花」と讃えた風光明媚な景観を、ビジターに知ってもらう目的で「象潟図屏風」を展示の中心にすえた(写真18)。さらに屏風の内容を理解してもらうために、50インチ大型タッチパネル付きのディスプレイを準備した。象潟を巡る開発と相克の歴史は、展示ケースを使い、パネルおよび文書類等の資料を展示することで対応した。

善光寺地震の「町の復興・人生の再生」では、幕末の志士である清川八郎がみた当時の状況を織り交ぜながら展示が進行する。ここでも善光寺地震による稲荷山の宿場町の火災延焼状況をCGで再現しつつ、復興する苦難の道を展示につなげようともくろんだ。展示場では、災害復興の資金集



写真17 「鎌原村復興絵図」と鎌原観音堂奉仕会の語りを撮影したビデオによる展示

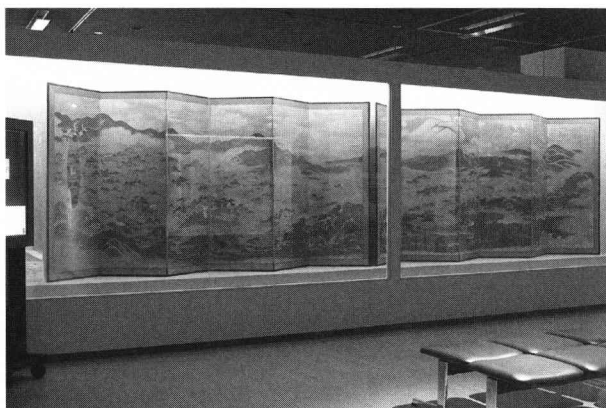


写真18 「象潟図屏風」を展示の中心にすえた展示
左に少し見えているのが大型タッチパネル



写真19 富くじの実演



写真20 鯰絵を大きく引き延ばしたネプタ風の展示

めのためにおこなわれた富くじの実演をおこなった。少しでも災害と人間社会の関係を実感してもらうとともに、あそび心のある展示を演出するためである（写真19）。

鯰絵は、安政江戸地震のさいに地震直後から大量に発行された。のぞきケースに実物資料を展示し、鯰絵が庶民の気力回復の手段であったこと、鯰絵に描かれている神は江戸庶民にはなじみの深いものであったこと、そして一見ユーモラスな鯰絵にも災害の死者を悼む庶民の思いがこめられていることが解説されている。

ケースの上には、鯰絵を大きく引き延ばしたものを布に印刷し、それをネプタ風に展示した（写真20）。これは、鯰絵のおもしろさを大きくすることでより印象づけたかったことと、復興の主人公が「人」であることを描かれた江戸庶民を通じて感じてもらいたかったからである。また災害展示はどうしても、人の死と結びつき、暗いイメージをもつ。最後のコーナーは、富くじの実演とともに、なるべく展示を明るく終わらせたいという意図も働いていた。

最後のコーナーである阪神大震災の「ボランティア問題」は、本研究報告で担当した寺田自身が詳しく述べているのでここでは省略する。



写真21 チョコレートを使った火山の実験。「歴博探検，子ども講座」の様子（秋田大学，林 信太郎が担当）

4 マンパワーの活用

今回は展示を活用するもう一つの工夫として，研究者のマンパワーを利用した。今回の展示は各コーナーのはじめに，担当した研究者の似顔絵がはってある。このような記名展示にしたのは，研究者の顔のみえる展示を意図したからである。そして毎週土曜日，または日曜日に，展示を企画した研究者自身が，ギャラリートークをおこなった。その回数は19回に及ぶ。

展示は，実際展示をおこなった研究者の解説がもっともおもしろい。それだけでなく研究に対する情熱や学問の知的興奮をビジターに伝えることも研究者の社会的役割であり，それがまたビジターを展示に引きつける重要なファクターになると考えたからである。

さらに歴博が現在一般市民に情報を公開している，あらゆるチャンネルを利用することにした。第43回歴博フォーラム「新しい世紀の災害論」（7月19日，東京・銀座ヤマハホール）をはじめ，研究集会「歴史が伝える災害像/科学が開く防災力」（9月14日，歴博講堂），それに3回の歴博講演，3回の「歴博探検，子ども講座」をこの企画展示にあてた（写真21）。

今回の展示では，展示の内容，それにさまざまな催しといった内容をポスターに盛り込むため，「新聞型ポスター」という形式にした（写真22）。従来の歴博が作ってきたポスターは，イメージポスターに近いものである。ポスターのデザインは，見栄えする展示資料のいくつかをバックにして，そこに展示の題名を大きく印刷する場合が多い。しかし繰り返して述べるように，歴博の展示は「研究展示」であり，優品による集客を目的としていない。それならばポスターも研究展示にあわせた，内容を詳しく盛り込んだポスターを考えるべきではないかというのが発想の原点になっている。「新聞型ポスター」は，「見る」というよりもむしろ「読む」ポスターである。評価はさまざまであったが歴博が研究展示をめざすならば，こうした広報媒体にもその特徴を反映すべきではないだろうか。



写真22 新聞型ポスター

最後に

筆者にとって、今回の展示は2つの目的があった。その1点は、専門外の研究分野の展示に関わることで、新たな「展示学」ともいうべき領域について考えてみたかったことである。

Ⅱ章の「公募型企画展示の成立過程」で紹介した、歴博に対する外部評価である「国立歴史民俗博物館第三者評価報告書」では、歴博の展示組織に関して以下のように評価している。「日本の博物館では、資料の修復、複製・模型、解説パネルの制作、展示ケースや演示具の製作の多くを展示業者に委託するのが慣例となっている」と指摘し、その構造を改革することは現状では不可能に近いと述べている。しかし外国には展示業者は存在しないと述べ、「教員が展示のリーダーシップをとれるだけの識見と発想力をもつことであり、また早い段階から業務を業者に一任しないで、最後まで主体的に関わることである」と提言している。

歴博の展示は、いわゆる優品展示ではない。歴博の展示は「研究展示」である。展示の目的は歴博の研究成果を、広く一般市民を対象としてわかりやすく公開することである。そのため、「研究展示だからわかりにくいのは仕方ない」という理屈は成り立たない。

近世の災害史が専門ではない筆者が今回の企画展示に参加した動機は、第三者報告書が提言するように、歴博という博物館に勤めるものとして、研究を展示とし一般のビジターにわかりやすく表現する方法を模索する必要があると考えたからである。新たな「展示博物館学」ともいうべき学問を確立するには、博物館員が自身の専門外であるテーマについても展示をコーディネートする必要があるのではないかと考えている。

2点目は、歴史展示を考える上での問題点とその具体的な解決策を提示することである。「堅い、暗い、気取っている、難しい、敷居が高い、まじめ過ぎる」。これはある博物館が一般の市民にアンケートをとった結果である。今回の災害展示は特に歴史系の展示がもつ、このイメージを少しでも破壊したいというのが我々の希望だった。展示に明確なコンセプトとストーリー性をもたせ展示を劇場化する。そしてあそび心をもった展示を工夫することで、見る側に興味の糸口を作ることが必要だと考えた。そしてCG、タッチパネル、ビデオ、パソコンを多用することで動きのある展示を演出したいと考えた。

さて展示構成には、「死から生へと」というもう一つの意図が隠されている。エントランスから中庭に降り、津波にあうことで、ビジターは一度擬似的な死を体験する。企画展示室は、地下室という構造上の特質をいかして、地球の地下に起こる災害のメカニズムや実態を体感してもらう。しかしそれだけでは、ビジターは暗い気持ちで展示を後にしなければならない。そこで最後のコーナーは災害から立ち上がる「人間」を中心にする展示構成にした。

展示は、さまざまな資料を展示する。知識を得る場としての役目をもっている。しかしそれだけでなく、みる側に感動をあたえなくてはならないと思う。人を感動させる歴史展示とは、それは歴史のダイナミズムを感じさせる展示であり、人間は何をしてきたのか、人間とは一体何なのかという問いを見る側に感じさせることではないだろうか。

この記録が今後開催される展示を考えていく上で、少しでも参考になるなら筆者としては望外の

幸せである。

謝辞

展示は、一人では開催できない。公募型企画展示「ドキュメント災害史」では、共同研究・展示プロジェクト委員をはじめ、日本各地のさまざまな方にお世話になった。ここでは一人一人の名前はだせないが、今回の企画に賛同し、協力していただいた方々に謝辞を述べたい。次に歴博の企画展示は、歴博スタッフ全員がささえてはじめて可能になる。歴博の職員、特に管理部の方々に深く感謝の意を表したい。

今回の公募型企画展示は、歴博にとっては初めての試みであり、歴博内部におけるバックアップ体制は決して万全のものとはいえなかった。そのため外部メンバーである展示代表の北原糸子さんと寺田匡宏さんには、大変なご苦勞をおかけした。展示が開催にこぎ着けたのは、お二人の驚異的な頑張りがあった。最後にこの場をかりて、お二人にお詫びするとともに心から深く敬意を表したい。

註

(1)——2001年度の共同研究の詳しいメンバーは、『展示通信』6を参照。2002年度からの展示プロジェクト委員会のメンバーについては、企画展示図録『ドキュメント災害史1703—2003』を参照のこと。

(2)——明治29(1896)年6月15日、起こった地震による津波の被害。死者27,123人、被害家屋8,891戸。波高24mの被害を受けた村もあった。昭和8(1933)年3月3日の津波被害では死者3,008人、被害家屋7,263戸。また、昭和35年5月23日のチリ沖地震で発生した津波では死者106人、被害家屋約4,700戸をだした。

(3)——嘉永7(1854)11月4日、東海・東山・南海道で起こった東海地震と、5日に畿内・東海・東山・北陸・南海で起こった地震による津波では、房総から土佐沿岸、紀伊・四国・豊後・日向で数千人以上の死者がでた。

(4)——弘化4(1847)年3月24日、長野県善光寺を中心として起こった地震。善光寺開帳の参詣者約6～7,000人が地震と火災によって死亡した。

(5)——安政5(1858)年に飛騨・越中・加賀・越前で起こった地震。飛騨北部・越中で被害が大きかった。死者425人。

(6)——元禄地震 元禄16(1703)年11月23日に関東で起こった地震。東海道の相模～川崎は壊滅の被害を

受けた。地震後発生した津波により犬吠崎～下田でも6,500人以上の死者がでた。安政江戸地震 安政2(1855)10月2日江戸で起こった地震。江戸町方の死者約4,300人、武家の死者約2,600人、倒壊家屋は15,000戸。地震後多数の瓦版や鯉絵が出版された。関東大震災 大正12(1923)年9月1日発生した地震。東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城、静岡、山梨で被害。東京市では火災のため死者9万人、負傷者10万人、行方不明者4万人。全壊家屋12万戸。

(7)——宝永4(1707)年11月23～12月8日まで続いた噴火。火山弾によって山麓の須走村は75軒すべてが炎上倒壊、駿河武蔵一帯に火山灰が降り田畑に被害がでた。

(8)——寛政4(1792)年に起きた噴火。噴火と地震によって起きた眉山崩壊によって大規模な津波が発生。島原半島と肥後に大きな被害をもたらした。死者は14,000人以上とされる。その後小康状態を保っていたが、平成2(1990)年噴火。火砕流により死者43名をだした。

(9)——天明3(1783)年に起きた噴火。埋没800戸、死者2,000人。吾妻川の決壊や利根川の水害などをもたらした。

(10)——財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

参考文献

- 荒巻重雄 2003 「火山を知る」『ドキュメント災害史 1703—2003 地震・噴火・津波、そして復興』国立歴史民俗博物館
- 今村文彦 2003 「津波を知る」『ドキュメント災害史 1703—2003 地震・噴火・津波、そして復興』国立歴史民俗博物館
- 北原糸子 2002 「『歴史資料と災害像』の展示コンセプト」展示通信『歴史・災害・人間』6, 国立歴史民俗博物館
- 北原糸子 2003 a 「研究と展示の接点を求めて」『ドキュメント災害史 1703—2003 地震・噴火・津波、そして復興』国立歴史民俗博物館
- 北原糸子 2003 b 「災害展示の意義と防災教育—その手法と効果について—」『消防防災』第6号
- 北原糸子・寺田匡宏 2003 『歴史・災害・人間〈災害史・原論〉上』財歴史民俗博物館振興会
- 篠原 徹 2000 「研究活動概要」『国立歴史民俗博物館研究年報9 (2000年度)』国立歴史民俗博物館
- 篠原 徹 2002 「総合と叙述」展示通信『歴史・災害・人間』10, 国立歴史民俗博物館 (『歴史・災害・人間〈災害史・原論〉編』に再録)
- 首藤伸夫 2001 「津波工学からみた防災と展示」展示通信『歴史・災害・人間』2, 国立歴史民俗博物館 (『歴史・災害・人間〈災害史・原論〉編』に再録)
- 寺田匡宏 2002 「歴史学と記録論」『展示通信』11, 国立歴史民俗博物館
- 寺田匡宏 2004 「記憶の比較史—震災後/テロ後、加速する「歴史」の時間論—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第109集, 国立歴史民俗博物館
- ドキュメント災害史展示プロジェクト委員会編 2003 『ドキュメント災害史 1703—2003 地震・噴火・津波、そして復興』国立歴史民俗博物館
- 西谷 大・設楽博己 1999 『おもしろ歴博シリーズ 1 模型で見る歴史のドラマ—ジオラマのできるまで—』財歴史民俗博物館振興会
- 西谷 大 2001 a 「展示の文法その一 主語と述語」展示通信『歴史・災害・人間』1, 国立歴史民俗博物館 (『歴史・災害・人間〈展示の文法〉編』に再録)
- 西谷 大 2001 b 「展示の文法その二 展示の視点と異相」展示通信『歴史・災害・人間』2, 国立歴史民俗博物館 (『歴史・災害・人間〈展示の文法〉編』に再録)
- 西谷 大 2001 c 「展示の文法その三 災害展示のメッセージ」展示通信『歴史・災害・人間』4, 国立歴史民俗博物館 (『歴史・災害・人間〈展示の文法〉編』に再録)
- 西谷 大 2002 a 「展示の文法その四 展示構想たたき台第一次案」展示通信『歴史・災害・人間』6, 国立歴史民俗博物館 (『歴史・災害・人間〈展示の文法〉編』に再録)
- 西谷 大 2002 b 「展示の文法その五 セブン—イレブンと博物館」展示通信『歴史・災害・人間』7, 国立歴史民俗博物館 (『歴史・災害・人間〈展示の文法〉編』に再録)
- 西谷 大 2002 c 「展示の文法その六 展示は劇的か」展示通信『歴史・災害・人間』8, 国立歴史民俗博物館 (『歴史・災害・人間〈展示の文法〉編』に再録)
- 西谷 大 2003 a 「展示の文法その七 展示とあそび心」展示通信『歴史・災害・人間』11, 国立歴史民俗博物館 (『歴史・災害・人間〈展示の文法〉編』に再録)
- 西谷 大 2003 b 「『人はなぜ博物館にいくのか?』あるいは『人はなぜ博物館にいかないのか?』」『歴史・災害・人間〈展示の文法〉編』西谷大・寺田匡宏編, 財歴史民俗博物館振興会
- 西谷 大・寺田匡宏 2003 c 「歴史・災害・人間〈展示の文法〉下」財歴史民俗博物館振興会
- 西谷 大 2003 d 「博物館の挑戦」『ドキュメント災害史 1703—2003 地震・噴火・津波、そして復興』国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2004 「挑戦する博物館」季刊誌「国づくりと研修」冬季号特集「博物館へいこう」, 全国研修センター
- 原田憲一 2001 「日本の進路と地学教育の役割」『21世紀の地学教育を考える大阪フォーラム』報告書
- 藤尾慎一郎 1998 「企画展示『倭国乱る—卑弥呼の登場まで—』」『国立歴史民俗博物館研究報告』第76集, 国立歴史民俗博物館

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2004年5月17日受理, 2004年7月21日審査終了)